Envision a future world!

君が、世界を創造する。

大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム

プログラム案内

＜ 2024年度版 ＞

OSAKA UNIVERSITY

OSAKA UNIVERSITY
CROSS-BOUNDARY INNOVATION PROGRAM

Message

大阪大学総長　西尾 章治郎

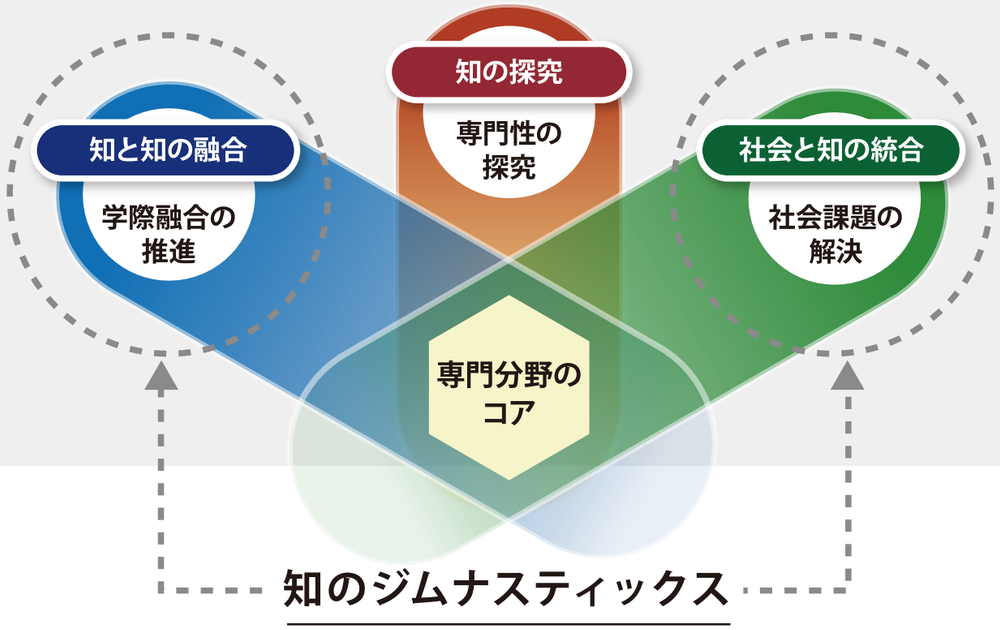
大阪大学が目指す新たな大学像
さきがけとしての
「超域イノベーション博士課程プログラム」

大阪大学はOUマスタープラン2027のもと、社会との共創を通して、地域から世界全体に及ぶさまざまな課題を解決し、「生きがいを育む社会」を創造する大学となることを目指しています。全ての人が心身の健康を保ちながら社会参画ができ、生きがいを育むことにより、Well-being、すなわち一人ひとりの多様な幸せを実現できる社会。それが大阪大学の目指す理想の社会像です。その実現に向け、本学は、常に変化し続ける社会の中でリーダーシップを発揮し、新しい価値と進化した知を創造するとともに、卓越した人材の輩出をより一層推し進め、社会変革にこれまで以上に積極的に挑戦していきます。

この社会変革の重要な鍵を握る高度な人材の育成を担う大学院教育には従来から専門研究、学際研究に加えて、社会における諸問題の本質を捉えた上で新たな課題を見つけ出し、立場を超えて解決策を共創していく「社会と知の統合」を担う人材の養成が求められています。超域イノベーション博士課程プログラムは、大阪大学が2012年度から開設している大学院の特別プログラムであり、「社会と知の統合」に資する大学院教育の“さきがけ”です。本プログラムでは、文理を超えた14の研究科から選抜された履修生が集い、在籍研究科での専門性の探求を基軸として、専門や立場の“境域”を超え、ものごとの本質を捉える俯瞰力と、未知で複雑で困難な課題の解決に挑んでいく実践力を育んでいく独自のコースワークが展開されています。

大阪大学では、多様な人々との関わりの中で問題の本質にアプローチする手法と経験を獲得し、それにより社会の様々な方面で新たなキャリアパスを拓いていきたい、そのような未来に向けたチャレンジを志す大学院生の超域イノベーション博士課程プログラムへの応募を待っています。

学際融合・社会連携を指向した双翼型大学院教育システム
Double-Wing Academic Architecture (DWAA)

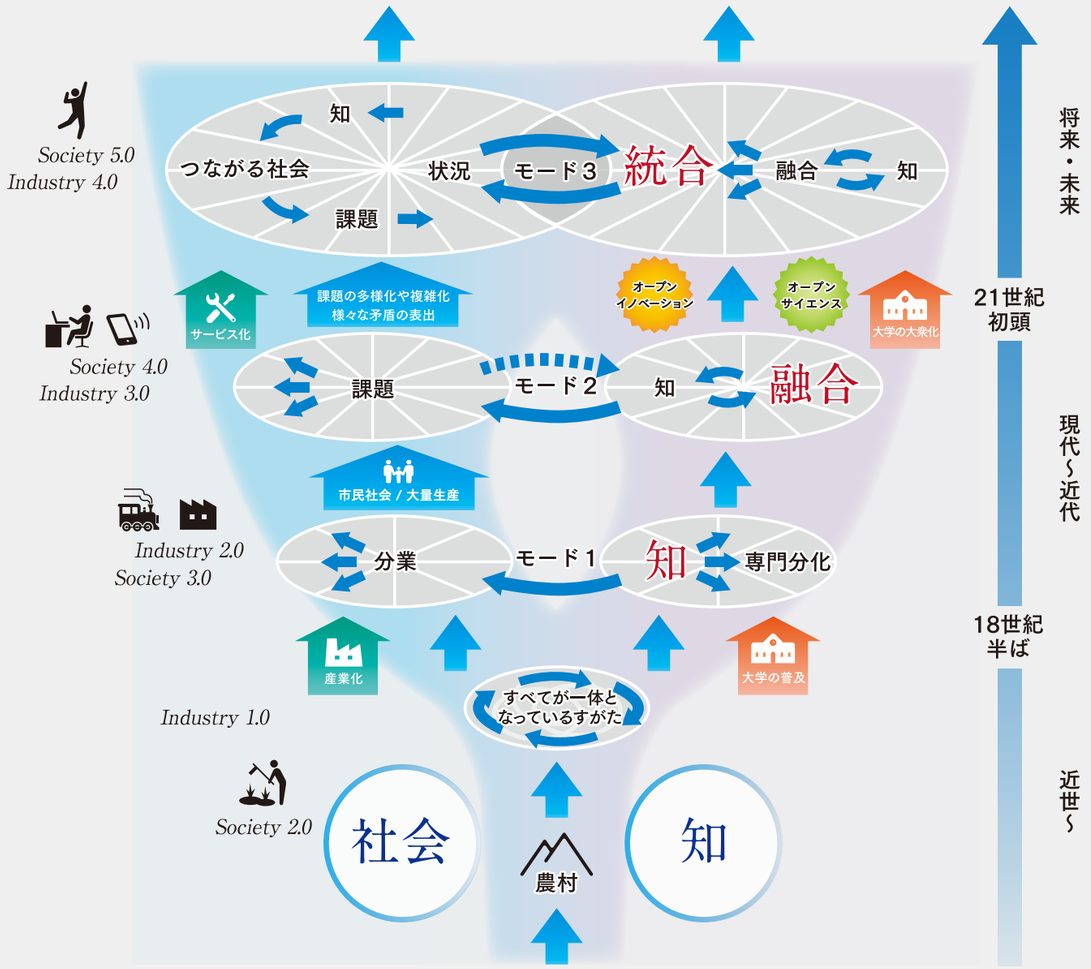


知の探究　専門分野を深め、専門家を育成する教育（これまでの大学院教育の方向性）

知と知の融合　いくつかの異なる学問・研究分野からなる複合領域を学修する教育

社会と知の統合　社会課題に対する解決に向けての実践的な取り組みを通じて学修する教育

変貌する社会と知の世界、それらの関係「社会と知の統合」が求められる未来



社会と知の関係をめぐる最近の動向

今日の社会はいろいろな意味で大きな変動期にあります。サイバー空間とフィジカル空間が高度に融合する第4次産業革命の到来や人工知能の進展のもと、世の中のしくみが組み変わり、求められる人材や職種が大きく変化することが予測されています。新たな科学技術や産業の進展に向けて、我が国の科学技術政策では、様々なものやことが相互につながる連鎖のもとで世の中や生活が従来とは異なる水準で豊かになる超スマート社会、Society 5.0が展望されています。

そのような明るい未来像の背後では、国連において、貧困や飢餓、福祉や教育、生活や都市の環境、地球環境の持続可能性、平和と公正など、従来は個別的に取り上げられてきた各種の課題を包括的に取り上げ、それらの関係性をも含めた解決を目指そうとする持続可能な開発目標、Sustainable Development Goals (SDGs)が人類共通のアジェンダとして設定されています。

社会と知の関係がたどってきた道

世の中が至るところ、農村であった17世紀の代表的哲学者Gottfried Wilhelm Leibniz (1646-1716)は、微積分法の考案者であり、世俗的には国家官僚でもあり、時として商人でもあり、宗教家でもありました。往時の知識人とは、程度の差こそあれ、そういうものだったのです。

それに対して、18世紀半ばに起こった動力源の刷新は産業革命を起こし、世の中を一変させます。産業の躍進は、裏を返せば、人々が担う役割を個々に専業化し高度化することでした。知の拠点としての大学も、そのような分業に呼応するかたちで専門を分化させ、領域毎の専門家を育成する装置となっていきます。分業がさらに進み、大量生産のもとで市民社会が形成され、社会の課題はより複雑になりました。知の世界では、複雑化した課題に対応していくべく、技術経営、医工連携などを典型として、様々な知を融合することも時代の流れになってきています。

今日の社会では、新たな価値の創出に向けて、産業界では知識のソースを社外に限らず大学にも求めようとするオープンイノベーションの動きが活発になっています。先端科学では研究者がグローバルに連携してより深い知の世界に挑んでいくオープンサイエンスが求められています。しかしながら、社会課題の多様化や複雑化は留まるところを知らず、様々な矛盾がより深いレベルから浮かび上がってきています。旧来からの知の営みは分断された専門領域毎に進められ、せいぜい、明確な課題に対して近接する領域間での融合が行われるに留まっていましたが、複雑で困難な幾多の状況を克服する上で、各方面でそのような営みを超える転換点を描き出すことが求められています。

社会と知の統合とは？

上記の現実に対して、社会と知の世界を股にかけ多方面で活躍したLeibnizは、どのような形で今に蘇るのでしょうか？

Society 5.0として展望され、SDGsが挑もうとしている未来では、今では当たり前となっている社会での分業の体制や知の世界における専門分化のあり様がイノベーションに向けた限界として立ちはだかります。社会の現実に対して専門を超えた俯瞰力で立ち向かい、未知なる状況に入り込んで、その解釈の中から解くべき課題を着想し、独創的な関係性を描き出す。そのもとで、深い専門性を軸としながらも様々な専門性との横断的な知の営みにより転換点を構想することから始め、社会で新たな価値を生み出す「社会と知の統合」が求められ始めています。

この“統合”の担い手には、基軸となる自身の専門における深い力、様々な知の力を縦横無尽に使いこなす力、はるかにスケールの大きなビジョンやストーリーを描いていく力、そのもとに人々が集い、共に動いていく力、……、それらの総体として未来への挑戦を牽引していく力が求められます。様々な専門の人々が織りなすシンフォニーのコンポーザーでありコンダクター、それが未来のLeibnizなのかもしれません。

超域イノベーション博士課程プログラムでは、各研究科・各専門分野で培われる深い専門力を基盤として、未来のLeibnizに求められる新たな道を創っていくための知識やスキル、力量に向けた“もう一つの基盤”を独自のコースワークにより身に付けていくことができます。

「超域イノベーション博士課程プログラム」※1は、大阪大学の 研究科に在籍する大学院生の中から選抜された履修生が集い、「社会と知の統合」の担い手へと 育っていくところ

教育カリキュラムの基本構成

超域イノベーション博士課程プログラム※1コースワーク

Basicコース

本履修生特別メニュー

- 海外での実践活動
- チューター教員制度などによる多角的な学習の支援

共通メニュー

＜ ラーニング※2 ＞

- 課題設定・解決能力の基礎を修得するためのワークショップ・プロジェクト型授業
- 社会における課題のあり様や専門を社会で活かすためのスキルに関する授業

＜ アクティビティ ＞

- 自主的活動への経費支援（審査あり）
- 学生提案による社会実践の取組み

博士前期課程（2年間）※3

Advancedコース

Basicコースもしくはそれに相当する基盤に社会での実践に関わる基盤を重ねながら、一連の基盤を深化させ、博士論文研究ともつなぎ合わせていくことにより、社会と知の統合を推進するための総合力を習得するコースワーク

共通メニュー

- 企業等と連携した社会課題についての実践的なプロジェクト学習の授業
- 総合力を養うことを目的として、社会における具体的な実践の場において履修生が自主的に企画・実践に取り組む授業
- チューター教員制度などによる多角的な学修の支援

博士後期課程（3年間）※4

Basicコース 履修生選抜

本履修生（5年一貫制）

準履修生
（Basicコースの一部を履修する者）

【修了】
超域 副専攻/副プロ

Advancedコース※5 履修生編入試験

【修了】
学位記にプログラム修了を付記

5年一貫制について：本履修生がBasicコースを修了した場合、選抜試験を経ずAdvancedコースへ進学可能です。

在籍研究科での専門教育　　在籍研究科での博士論文・研究

超域イノベーション博士課程プログラムは、「社会と知の統合」を担っていく高度人材を育成する、5年制博士課程（博士前期課程・博士後期課程の区分制および5年一貫制博士課程。一般には4年制学部卒業者が進学する。）および医歯薬系等の4年制博士課程（一般には6年制学部卒業者が進学する。）に在籍する学生に対する副専攻方式の特別プログラムです。本プログラムの5年間ないし4年間の課程は下記の2つのコースに分かれています。

Basic コース（1～2年次）	社会における状況を俯瞰して課題を発見する力、課題を統合的に解決していく力に関わる基盤を養う
Advanced コース（5年制：3～5年次 4年制：3～4年次）	Basicコースもしくはそれに相当する基盤に社会での実践に関わる基盤を重ねながら、一連の基盤を深化させ、博士論文研究ともつなぎ合わせていくことにより、社会の知の統合を推進するための総合力を養う

Basicコースの履修にはAdvancedコースへの進学を前提とする本履修生とAdvancedコースへの進学を前提としない準履修生の2つの形式があります。2年制の修士課程に在籍する学生はBasicコースの準履修生の場合に限り履修することができます。

※1 本プログラムは大阪大学大学院学則第5条の6に規定されている博士課程教育リーディングプログラムの一つとして開設されています。
※2 Basicコース・ラーニングの部分は同第5条の7に規定されている大学院副専攻プログラム・大学院高度副プログラムに位置付けられます。
※3 博士課程（5年制・4年制）の1~2年次と修士課程も該当します。
※4 博士課程（5年制・4年制）の3年次以降も該当します。博士課程（4年制）の場合、期間は2年間になります。
なお、Advancedコースの標準年限はプログラムの状況を鑑みて短縮される場合があります。
※5 編入試験については、定員の空き枠およびプログラムの実施状況を鑑みて試験実施の有無を判断します。

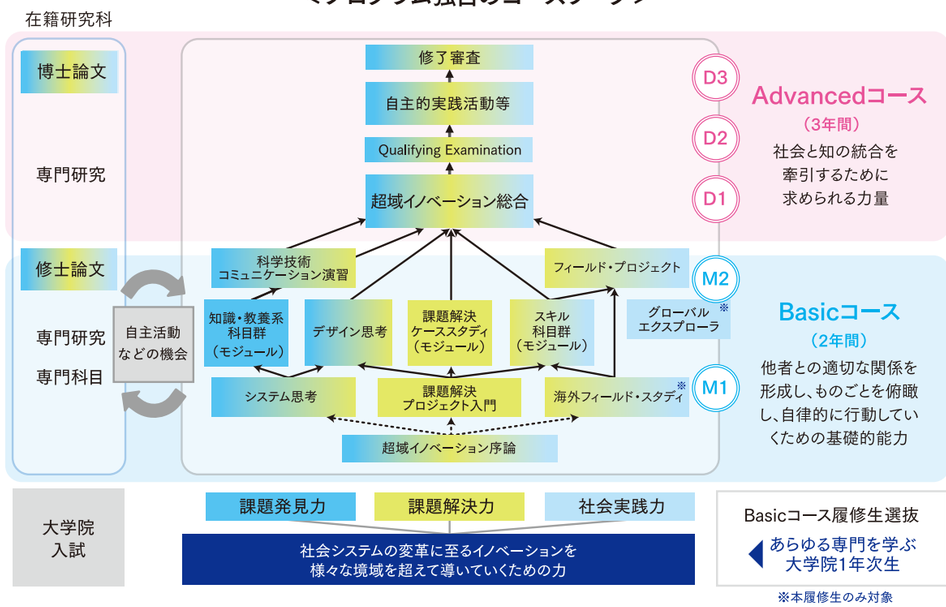
コースワークの概要

本プログラムは、ひとりひとりの学びを展開しながら、新たに学ぶべきことを把握し、さらに必要となる知識を修得するという循環の中で、統合的な学びを達成することを目指しています。コースワークでは、現実の課題がどこにあるのかを発見するための調査力や理解力を高め、専門に裏づけられた確かな知識と応用力を修得し、そして高度な知識を実践の中で活かすことのできる汎用的なスキルを磨いていきます。

“社会と知の統合”に向けたコースワークの体系

（ 5年制博士課程在籍者の場合／科目等は主要なものを抜粋 ※2019年度のものです ）

＜プログラム独自のコースワーク＞



コースワークの特色

文理統合型・学生参加型教育

本プログラムは、文理を横断する多様なバックグラウンドを持つ履修生が、専門や学年を超えて共に主体的に参画しながら切磋琢磨できるよう、学修の進展に応じた様々な規模のワークショップやプロジェクト学習による授業をコースワークに整備しています。

世界の中心と周辺を知る

本プログラムでは、海外などでの経験を得る機会をコースワークに整備しています。履修生は、先進国の訪問だけではなく、いわゆる開発途上国での体験なども通じて、社会と知の統合の担い手に相応しい素養を身に付けることができます。

課題発見型から課題解決型へ

本プログラムでは、企業や行政などの学外の課題提供者と連携し、社会課題を発見し、それを解決へと導いていく力を身に付けるためのプロジェクト学習を学修の進展に応じてコースワークの各段階に整備しています。

Basicコース （1～2年次の様々な科目）

1～2年次の科目例

超域イノベーション序論

超域イノベーション博士課程プログラム全体についての導入科目です。超域イノベーションの実現に向けて下記について総合的に論じます。

- 未知で複雑で困難な課題の解決を導くために様々な境域を超えたイノベーションが求められている現代社会やその将来像。
- その具体的論点としての知の拠点である大学と知が展開される社会との関係。
- 本プログラムが現代社会の課題に対する大学側の一つの応答を目指していること。

デザイン思考

異分野の人材と連携し、チーム活動によってより良いアイデアを創出して問題を解決するための手法を学ぶ授業です。

- チームで協働し、所定の目的を達成するために有効な“デザイン思考”によるプロセスコントロールを習得します。
- 共感・理解、問題定義、アイデア創出、プロトタイピングというプロセスを迅速に繰り返すことが問題解決のために必要であることを理論の面から理解します。

システム思考

複雑な問題の構造を把握し、全体最適を目指すための基本的手法を理論と実践の両面から習得する授業です。

- 複雑な対象を、要素とそれらの間のつながりや相互関係により整理して理解する“システム”という考え方を身につけ、その考え方を自在に操れるようになることを目指します。
- ループ図等の手法を駆使し、“システム”という視点のもとで、対象の全体を俯瞰的に捉えて、問題解決の鍵となる根本の特定と効果的な切り口の発見を実行するための方法論を学びます。

フューチャー・デザイン

フューチャー・デザインとは、将来世代につながる持続可能な社会を構築するための様々な社会の仕組みのデザインとその実践のことを言います。「仮想将来世代」を現世代に導入し、新たな社会の有り様を想像する取り組みが様々な自治体でも始まっています。

- フューチャー・デザインの考え方や意義について理解します。
- 自治体等での応用実践例について、現場の担当者等との対話やグループワークを通して学びます。

フィールド・プロジェクト

社会との関わりの中で課題解決に挑むことを通じて、社会課題に潜む要因や意味の広がり方、それらへの対処方法についての理解を深めるプロジェクト型演習です。

- 企業／自治体／NPO等から提供いただいた身近な課題への取り組みを通じて、社会における境域の有り様にアプローチします。
- これまでの授業で培った考え方・手法を統合し、数週間程度の短期プロジェクトの中で実際の社会問題に適用する過程で理解の深化を促進します。

課題解決ケーススタディ

社会における実際の課題解決のあり様をケースとして議論することを通じて課題の発見からコンセプトの創造、解決案の実装に至る過程の実際についての理解を深めていく授業です。

- 実際の課題解決においてシステム思考やデザイン思考、プロセスコントロールなどがどのような意味を持っていたかを認識します。
- 各ケースについてのワークショップ型の演習を通じて、鍵となるポイントを的確に理解し、各種の考え方の理解を深めます。
- 異なるケースについての授業を交差させることを通じて、社会課題と課題解決が多様であることを理解していきます。

海外フィールド・スタディ / グローバルエクスプローラ（本履修生のみ対象）

各履修生がそれぞれの関心や必要性に応じて国内外の企業や大学、非営利団体(NPO、NGO)、国際機関などを単身で訪問します。訪問で得た知見やネットワークなどを踏まえて、将来の諸活動やキャリアの展開に向けたアクションプランを作成し、キャリア形成のイメージを構築し具体化します。

事前学習を経て、海外等での数週間の研修を行います。文化的、政治的、社会的、経済的に異なる背景の人々が暮らす地域を訪問し、普段ふれあうことのない他者と対峙し、その社会の課題をともに考えることを通じて、自分自身の価値観を相対化し、世界の多様性を理解します。

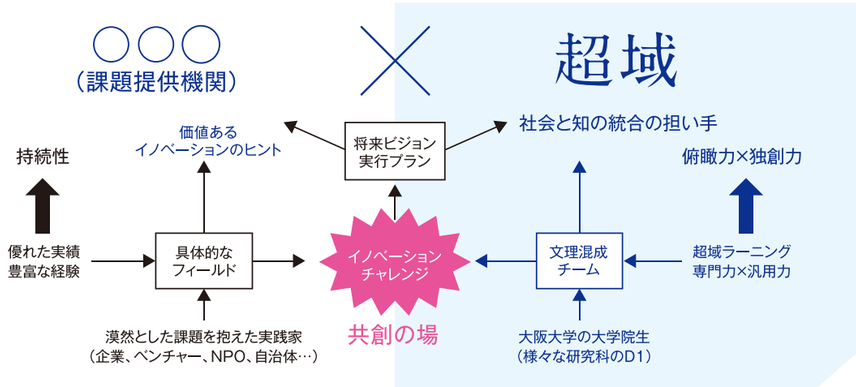
※プログラムの実施状況に応じて不開講となる可能性があります。

Advancedコース（3年次～）のコア科目：超域イノベーション総合

コースワークの概要

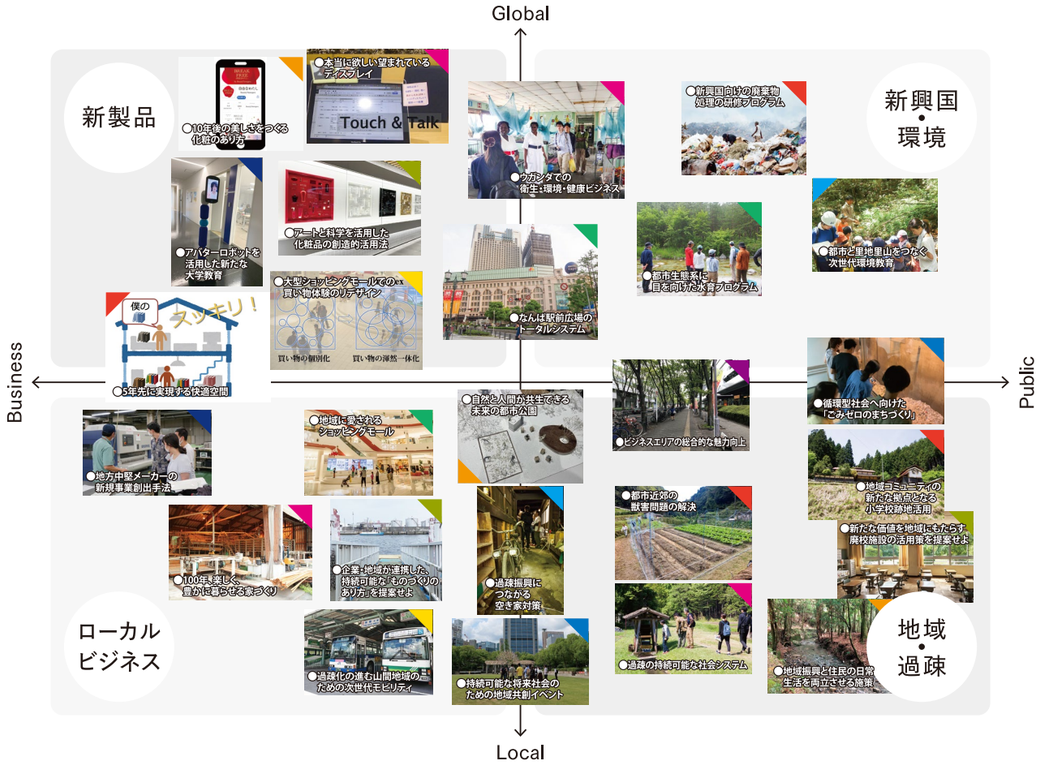
超域イノベーション総合は、社会における実際の問題を取り上げ、状況の理解から問題の定義、その問題に対する解決策（フューチャープラン等）の立案に取り組む、8ヶ月の長期プロジェクト演習です。本プロジェクト演習を通して、カリキュラムや専門研究でこれまでに学んできた知識と経験とを結びつけ、さらに全く新しい、より複雑な状況で適用できるようになるための総合的な学びを目指しています。

具体的には、企業／自治体／NPO等に具体的な領域やフィールドをもった課題提供機関として御協力いただいています。多様な研究科から集まった超域プログラム履修生は、学際的な大学院生チームならではの、枠に囚われない発想で未来の姿を描きます。そして、現場観察やフィールドワーク、調査、プロトタイピング、検証をくり返しながら、現在の延長線上にはない“新しい価値創出”の提案に挑戦します。



超域イノベーション総合でのプロジェクト課題

2014年度 2015年度 2016年度 2017年度 2018年度 2019年度 2020年度 2021年度 2022年度 2023年度



事前学習	理解・共感	課題定義・素案作成	中間発表	素案作成・検証	骨子づくり	最終発表	報告書作成
4～5月	6月	7月	8～9月	10月	11～12月	1月	2月

▶キックオフ

課題提供機関と学生の初顔合わせです。企業／自治体／NPO等の概要、プロジェクトとして取り組む課題とその背景についての説明を受けた後、課題提供機関との打ち合わせを行い、今後の方向性や予定を議論しました。

▶進捗報告

プロジェクトの進行段階に合わせて、週に1回のペースで30分程度のレクチャーを受けました。レクチャーの中では教員から各段階に必要な考え方、手法等の補足が行われました。

▶ミニレクチャー

7月には教員へ向けての進捗報告会を行いました。教員からのフィードバックを受けて計画を修正するとともに、異なる課題に取り組む他のチームの進捗を知ることでモチベーションが喚起されました。

▶中間報告会

課題提供機関である企業／自治体／NPO等の関係者を招き、プロジェクトの進行度合いを報告しました。ここでは各チームが実施した調査の結果や定義した問題、解決のプロトタイプを発表し、関係者からフィードバックをいただきました。いただいた意見をもとに方向性の修正および最終提案に向けた進行計画の調整を行いました。

▶進捗報告書

11月初旬には再び教員に向けた進捗報告会を行い、最終提案の素描を提示しました。プロジェクトの終結に向けて必要な事項の洗い出しを行いました。

▶最終発表会

プロジェクトの集大成として課題提供機関の関係者を招き、最終的な提案内容の発表を行いました。これまでに学んだ知識・技術を駆使して行った8ヶ月に渡る調査と議論を通じて見えてきた課題の本質を明らかにし、新たな価値を創造するビジョンとそれを実現するための実行プランを提案しました。

▶ふりかえり

プロジェクト終了後、8ヶ月間の活動を通して得たそれぞれの学びの振り返りと共有を行いました。また活動を行った現地へ訪問して多くの関係者へ提案内容の紹介を行い、広く意見をいただきました。

●充実したフィールドワーク、文献調査、プロトタイピング

活動期間中は課題内容への理解を深めるため、文献調査とともに現地でのフィールドワークを行い、現地で行われている活動への参加やインタビュー等を実施しました。綿密な調査を通じて課題を問い直し、課題そのものだけでなくその背景へも洞察を深めました。教室に留まらないフィールドワーク、何度も繰り返した議論、アイデアのプロトタイピングを通じて問題の本質へアプローチする提案を目指しました。

新たな価値を地域にもたらす廃校施設の　活用策を提案せよ

課題提供者：豊能町役場

●活動概要＆成果

継続的に進行する少子化は国家全体から地域社会に至るまで様々な影響を及ぼしています。小中学校の統廃合はそのひとつであり、全国の小学校数はこの20年で約2割の減少を見せています。このため廃校施設の利活用が多くの地域で課題となっていますが、学校施設は教育機能のみならず地域コミュニティの核として様々な機能を併せ持っています。本課題では、大阪府豊能町の廃校予定施設について、社会的機能の維持や地域振興への貢献など、複眼的な視点を含めた廃校施設活用策の提案を行いました。

構造的な人口流出

地域に資する活用策の提案に向けて、学生チームがまず取り組んだのが地域課題の分析でした。大阪府北部に位置する豊能町は、豊かな自然と都市部に隣接する立地という特性から子育て世代の移住が多いという特徴を持ち、若年層については転入超過となっています。一方、大学進学や就職に伴って20代前後の転出が非常に多く、このことが豊能町全体の人口減少に繋がっていることが見えてきました。大学や企業の誘致は短期的には難しく、また誘致により子育て世代が求める地域像との乖離が生じかねないというジレンマがありました。そこでこのチームが着目したのが高齢者でした。

高齢者による地域活性化モデル

人生100年時代において定年退職後のセカンドライフは人生の1／3近くを占めます。充実した生活と職を得て高齢者が活躍する場を形成し、高齢の移住者を多く呼び込むことで豊能町の人口維持と地域活性化を実現できないか、というのがこのチームのアイデアでした。

その核となるのが廃校施設を活用した高齢者Labです。この施設では、高齢者は趣味の充実や新たな職のための技術習得など、様々な「授業」を受けることができ、また自身のスキルを生かして講師になることもできます。高齢者や講師が地域の内外から集まることで自然にコミュニティが形成され、また行政や社会福祉施設との連携により情報の共有、スムーズな介護への接続といった効果も見込むことが出来ます。このようにして安心してセカンドライフを歩める地域に変化していくことが、このチームの描く豊能町の将来像でした。高齢者を活力源とみなし、少子高齢化時代に適応した新たな地域活性化モデルを提示した点で価値ある提案になったのではないかと感じます。

●課題提供者からの声

今年度も、本町の課題に取り組んでいただき感謝いたします。提案にあたっては、本町の人口推移や動向などの洗い出しや提案に至るまでの過程、並びに具体的な事例も出してもらい、「東ときわ台小学校における高齢者大学（高齢者Lab）」という提案をしてもらい、そこで出てきた諸問題（PRの手法、食事処等）については「光風台小学校に道の駅」を活用していくといった、発想力は素晴らしいと感じました。本プロジェクトは、社会に出てからも活かせる研究内容かと思いますので、また次年度もお願いしたいと考えております。

●履修生チームの声

このプロジェクトは、少子高齢化がキーワードとなり、豊能町に限らず、我が国全体が長らく取り組んできた社会構造変革の最前線に位置していました。実社会の課題に対処する一環として、多岐にわたる視点から1年間を通じて取り組むことは、将来の発展をけん引する立場として非常に有意義な経験でした。この過程で、課題の本質やステークホルダーの期待、解決策の実現可能性を多面的に分析し、評価することの重要性と難しさを痛感しました。また、提案内容が高く評価されたことは、大きな自信となり、今後の活動の基盤となるでしょう。

超域イノベーション総合　｜　2023年度実施プログラム成果

企業・地域が連携した、持続可能な「ものづくりのあり方」を提案せよ

課題提供者：株式会社木幡計器製作所／Garage Taisho / 大正・港・西淀川ものづくり事業実行委員会

●活動概要＆成果

かつて「東洋のマンチェスター」と呼ばれた大阪湾岸エリアは“ものづくりのまち”として栄え、今もなお様々な業種のものづくり企業が集積し、その技術力と伝統が息づいています。しかし、近年、産業構造の変化により企業の休廃業が増加しており、ものづくりのあり方にも変化が求められています。本課題では大阪府大正区を対象地として、ものづくりへの体験および制作機会を創出し、魅力を発信する事業提案を行うことで、ものづくりを軸に据えたまちづくりの実現を目指しました。

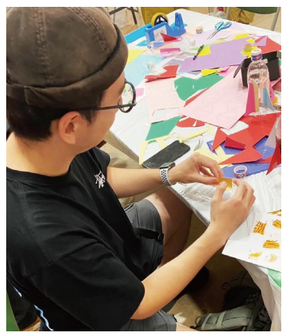
大正区を“もの”で満たす「ものづくり甲子園」

ものづくりをより身近に感じてもらうための体験価値を創出することができないか。調査を進める中で履修生チームは、2013年以降、継続開催されている大正ものづくりフェスタには多くの子どもたちが参加し、区内企業におけるオープンファクトリーや工場見学会には課外授業や修学旅行の生徒が数多く訪れており、「ものづくり」と「子ども」との間に繋がりが形成されていることを発見しました。そこで、大正区のものづくりが企業向けであり、区民の興味を引くことができていないという短所と、ものづくり企業が教育機関や子どもたちと積極的な交流を図っているという長所を掛け合わせることで、大正区を“もの”で満たすことを構想しました。子どもや学生に焦点を当てた「ものづくり甲子園」を展開し、ものづくりの魅力発信や区内外への認知度向上、様々なステークホルダーによる運営、そして事業の継続による地域活性化等、持続可能なまちづくり方針につながるアイデアを提案しました。

企業と地域が連携した新たなものづくりのあり方とは？

大正区では公民連携による「大正・港・西淀川ものづくり事業実行委員会」が主体となって、ものづくりの体験やイベントを通じて、地域の魅力向上やものづくり人材の確保、人と人とのつながりを醸成することを目的とした活動が展開されています。一方で、こうした活動がまちづくりの中核として持続的に機能する段階には至っておらず、ものづくり企業や区民、行政を巻き込む仕組みづくりが求められました。

履修生チームは現地調査を経て、大正区には多様なものづくりの技術が存在し、区民のものづくりやまちづくりへの関心が高い一方で、ものづくりと区民の接点が少ない点に着目しました。



●課題提供者からの声

大阪大学の超域イノベーション博士課程プログラムの取り組みに関与できたことを大変光栄に思います。このプロジェクトは、大阪市大正区に根ざしたものづくり企業と行政が連携し、地域固有の課題を解決するための新たなイノベーションを生み出すことを目指しました。学生たちの鮮やかなアイデアと、彼らの持つ技術的知識が、現実の社会課題解決に繋がる可能性を見せてくれたことは、私たち、ものづくり企業にとっても大きな学びとなりました。この経験は、企業としての取り組みにも新たな視角をもたらし、より広範な社会貢献への意識を高めるきっかけとなりました。将来に向けて、このような学際的な取り組みが更に発展し、実社会におけるイノベーションの推進に貢献していくことを心から願っています。

●履修生チームの声

課題について、課題提供者とは異なる視点・立場からものづくりを含む大正区の複雑な社会課題を俯瞰し、課題を特定および評価して解決策へと導く経験を一気通貫で積むことができた。特に、①フィールドワークやグループディスカッションなどの共同作業を通じて、多様な分野の学生や産官民の実践家とともに協力してチーム活動をする機会を得ることができたこと、②自分のアイデアに対し独創的かといった観点から評価を得られる機会を得たことが今後の研究活動および超域での活動における糧となった。尽力頂いた皆さまに感謝の意を表します。

アートと科学を活用した化粧品の創造的活用法

課題提供者：株式会社資生堂

●活動概要＆成果

アートと科学は、それぞれ化粧という行為にどんな関わりがあり、またどういった価値を新たにもたらし得るだろうか。広大な現代アートの世界と、日常的な化粧の特徴、そして博士課程の学生として向き合っている科学的関心を行き来しながら、手探りでプロジェクトがはじまりました。

瞬間と持続

認知神経科学、ロボット工学、社会学、科学哲学、保健学を専門とする学生たちのチームが、自らの専門性と現代アートの世界を掛け合わせながらたどり着いたキーワードは、「瞬間と持続」、そして「死」でした。人の死は、誰にでも訪れる瞬間であると同時に、残された人々の記憶を喚起し、持続的な時間と関係性を作り出す契機にもなります。それゆえ、永遠の美しさや、決して戻ることのない喪失を表現するアートの主題にもなるでしょう。

しかし、「終活」が社会問題として騒がれる現在であっても、人の死に際は、しばしばタブー視され、表立って表現される機会が限られているのが現状です。死に際のアート（表現、技法、作法）にもっと目を向けてもよいのではないか。そこには新しい社会的価値が隠れているのではないか。こうして履修生チームは、死化粧をプロジェクトの中心テーマに据えることにしました。

なりたい自分のための死化粧

死化粧は、よく知られた営みではありません。しかし実際には、病院や葬儀場、場合によって戦場や災害の現場において、世界中でなされています。考えたことがないだけで、誰もが一度は経験する可能性の高い営みです。調べを進めるなかで、そうした事実が知られていないことこそが、さまざまな問題の引き金になっていることに気づくことになります。「なりたい自分になる」ことが化粧のもつ重要なメッセージであるにも関わらず、死という人生の最も重要な場面でなされる化粧は、しばしば他人の手に委ねられ、なりたい自分とはかけ離れた「作業」にとどまってしまっているのではないか。死化粧をひとつのアートとして考えることで、死に際の自分らしさ、美しさ、さらには死を通した生のあり方に新たな光が当てられるのではないか。そのために、どんな表現を取る必要があるのか。

こうした問題意識のもと、プロジェクトの後半は、死化粧を考えなおすための効果的な展示企画案を作りこむ作業に取り組みました。プロジェクトで考案したコンセプトは、まずは資生堂ギャラリーの企画の一部として、2024年2月に実際に展示されました。その後、学芸員へのヒアリングや、展示スペースの視察、体験型の工夫を企画として練り上げ、2025年の展示企画の開催に向けて、提案書を作成しました。

●課題提供者からの声

提案いただいたアイディアは、社内活動で行っている新しいヘアメイクアップの立案の際のコンセプトとして活用させていただきました。この作品は2024年2月での一般展示を予定しています。

今回で課題提供は3回目になります。回ごとにチームの雰囲気やテーマの咀嚼の仕方、複数案を絞り込む際のクライテリア、プレゼンの仕方が異なり、その様子を遠くからではなく身内の視点で感じることができました。単に課題を解決に導くというよりは、どのように世界を描いていくかのヴィジョンを立てることができたように思います。

●履修生チームの声

資生堂さまからの「アートと科学を活用した化粧品の創造的活用」という課題では、私たち5人の中でも「化粧品の価値とは」「アートや科学ってなんだろう」と考えや定義もさまざまでなかなかグループとしての意見がまとまらないこともありました。ですが、超域独自の異なる専門分野からなるグループという特性を活かして、最終的に独創的なアイデアを提案できました。また、最終的にそのアイデアを企画書に書き起こし資生堂さまのギャラリーにて実際に展示できたことは、これから所属や分野の垣根を超えて協働を行うのにとても貴重な経験を得られました。

Advancedコース（3年次～）の活動：自主実践活動

（旧：超域イノベーション実践）

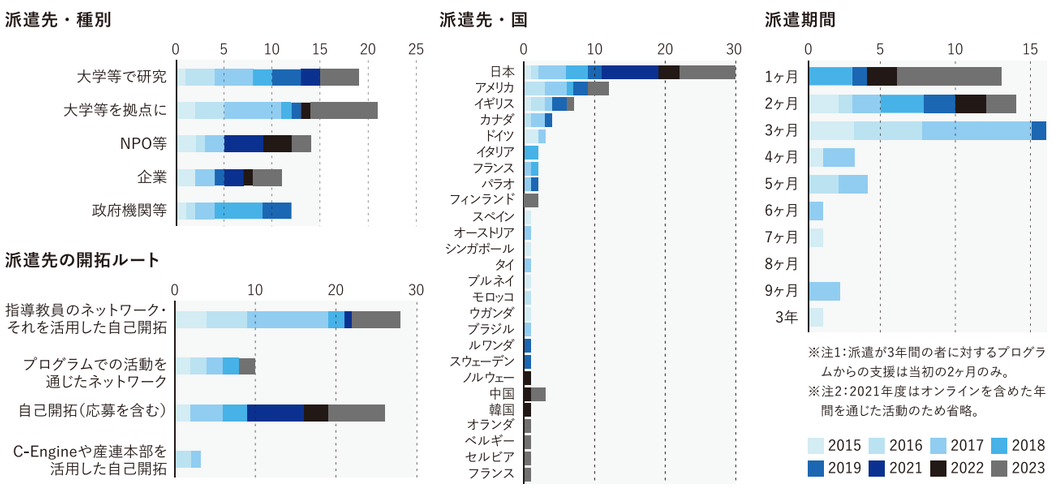
概要

自主実践活動とは、超域イノベーション博士課程プログラムの1年次から2年次までのコースワークで獲得した知識やスキルを社会における具体的な実践の場で活用することを通じて、それらを集約した総合力を身に付けることを目的として、履修生が自主的に企画して取り組む活動です。この活動を通じて、それまでの学修の成果をより着実なものとするとともに、総合力の着実な獲得やさらなる向上を図ることを目指します。活動内容は、インターンシップや共同研究の他、履修生の関心や専門に応じた課題に実践的に取り組むことを目指しています。

2015～2023年、8カ年、64名の実績（その他、プログラムからの支援に依らず同様の取り組みをした履修生あり）

※2020年度は、新型コロナ感染症への対応措置として海外での活動を実施せず。2021年度は、国内とオンラインで活動を実施。

派遣についてのデータ（2か国以上に渡って活動した履修生の成果を含む）



実践的研究者になるために―ドイツと日本における知の転換

言語文化研究科 言語社会専攻 大津真実

移動の時代と呼ばれる今日の社会において、移民やその子どもたちの社会参画は重要な課題です。私はこれまでドイツをフィールドに、移民の母親を対象とした自治体レベルの支援事業を調査し、移民の社会統合に関する研究を行ってきました。自主実践活動では「知の転換」をテーマに、ドイツの事例を踏まえ、日本において地域の特徴を捉えた一つの支援の在り方を示したいと考えました。同時に、これまで学んできた課題解決のスキルを実践的な場で応用したいという思いも抱いていました。そこで2019年からボランティアとして携わっていた公益財団法人とよなか国際交流協会（以下、協会）に協力を依頼し、(1)協会が提供する外国人の母親に関連する支援サービスの調査を通じて、ドイツの先行事例を土台に新しい取り組みを提案する、(2)これらの活動を通してネットワークを構築・強化し、現場とのコミュニケーションから立場や専門を超えて議論する力を向上させる、という二つの目的を設定しました。

活動ではまず、協会が提供する外国人の母親に関連する支援事業について、職員や外国人スタッフへのヒアリング及び活動視察を通して現状や課題を調査しました。また、現場の問題意識を明確にするため、活動の担い手である日本人のボランティアと参加者である外国人の母親を対象に、担当職員と協働でワークショップを実施しました。最後に、全ての調査結果を踏まえて新しい取り組みの提案を行いました。

本活動を通して、特にワークショップに向けた職員とのディスカッションや意見交換において、立場の異なる他者と協働する力を強化できたと考えます。また、既存のネットワークを起点に、新たな関係性を構築することもできました。一方で、自身に不足している視点やスキルも明らかになりました。専門や立場を超えて連携するには、初期段階に具体性のある全体像や方針を共有しておくことや、相手の立場や状況を意識して柔軟に情報を提示する能力を身につけることが必要であると実感しました。

提案の段階では、ドイツの先行事例と協会の取り組みを比較して共通点・相違点を浮き彫りにし、全体のコンセプトの中で個々の要素を検討しました。その過程で、これまでとは異なる視点から先行事例を再検討することができ、計画段階では類似事例と捉えていた取り組みでしたが、調査後には二つの事例の差異を認識するようになりました。

両者の違いがどこから生じるのか、その要因を探るため、私は翌年にドイツに渡航し、現地の支援団体の職員に対して自主実践活動の内容を紹介しながら、ディスカッションを行いました。その結果、支援に関わるステークホルダーの違いや、団体あるいは職員の理念・目標等が作用していることが示唆されました。

今回の自主実践活動によって、その後の国内外における研究活動は大きく前進したと感じています。同時に、異なる専門・立場の他者と協働しながら、日独間の知の転換を志す者として、本活動はそのための基本的・応用的知見を提供する機会となりました。

船舶海洋工学と水産業との関わり方を探る

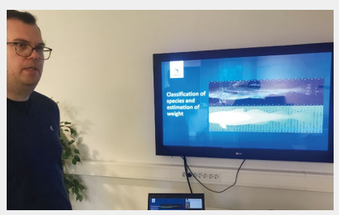
工学研究科 博士後期課程 鈴木寛太郎

かつて日本は造船大国として世界のトップに位置していました。しかし、近年の日本の造船業はその勢いを落とし、隣国の中国・韓国に差をつけられている状況にあります。このような状況を鑑み、私は自身の専門とする船舶分野の振興のために何ができるかを超域プログラムの活動を通して模索してきました。そこで、この自主実践活動では海という共通のフィールドでありながらも、日本ではあまり造船分野と協力体制が構築されていない水産業に着目し、造船と水産の共生と振興の可能性について考える活動を行いました。

まず日本の漁業の実情を知り、理解を深めるための活動を行いました。日本は世界6位の排他的経済水域を有しており、豊富な水産資源に恵まれています。しかし一方で、持続可能な水産資源の活用ができていないことが指摘されており、この課題に関しての調査が不可欠でした。そこで、長崎県対馬市にて持続可能な漁業の実現をミッションに掲げている合同会社フラットアワーにて5週間のインターンを実施しました。訪問先のフラットアワーでは実際に出漁、出荷、魚の加工、漁具の整備などの実務的な業務に加え、漁業に関する勉強会、ミーティングに参加して日本の漁業に関する知識の収集と課題の把握を行いました。

次に工学の分野で水産業に貢献できることを模索するため、水産大国と言われているノルウェーへ渡航しました。現地では養殖や水産資源管理に関する研究を行っているSINTEF Oceanと水産分野・船舶海洋工学分野で世界の最先端の研究を行っているノルウェー科学技術大学を訪問し、開発技術の視察、研究者とのディスカッションを行いました。SINTEF Oceanではスマート漁業に関する技術を視察することができ、実際に自身がフラットアワーで体験した業務が簡略化されていることや、国の施策で持続可能な水産業が促進されるシステムが構築されていることなどを知り、日本との差を強く感じました。

両者の活動を通して、自身の持つ船舶海洋工学に関連した専門性は将来的に沖合養殖の技術発展に貢献できるということに気がつけた一方で、ノルウェーに比べて日本の水産業は技術的な課題よりも漁師と漁協の関係や流通のシステムといった点にまだまだ多くの課題を残していることを痛感しました。すなわち、日本において造船業の振興とともに持続可能な水産業を形成していくためには、自身の専門性だけでなく超域で培うべき社会課題を解決するための総合的な力が重要であるということです。本活動は水産業への知識や水産分野の最先端な工学的技術についての知見を得る大変貴重な機会となったと同時に、超域的能力の重要性と自身のその能力の更なる向上の必要性を改めて認識するものとなりました。



履修から修了までの流れ

▶ Basicコースの修了

Basicコースの修了に際しては、プログラム併設の大学院副専攻プログラム（14単位以上）・大学院等高度副プログラム（8単位以上）のいずれかの修了要件を充足する必要があります。充足した場合には、当該の修了認定証が交付されます。

▶ BasicコースからAdvancedコースへの進級要件

Basicコースを本履修生として修了した者については別途試験等を受験することなくAdvancedコースへの進級が可能です。なお、Advanced編入試験については、定員の空き枠およびプログラムの実施状況を鑑みて試験実施の有無を判断します。

▶ Qualifying Examination（QE）

本プログラム3年次修了時に、所定単位の取得を前提としてQEを課し、プログラム履修継続の可否について総合的に判定します。在籍研究科での社会と知の統合に関する専門力の確実な向上を博士論文に関する研究計画書を通じて審査し、本プログラムによって獲得した能力および資質の総合的な人物評価を自己評価書に基づくプレゼンテーションおよび面接によって審査します。

▶ Advancedコースの修了要件

Advancedコースの修了に際しては、所定単位の取得を前提として最終試験を課します。最終試験を合格した者にはコースワーク等修了認定書が授与され、在籍研究科での博士学位の授与に際して学位記にプログラムの修了が付記されます。

履修生支援について

▶ 自主的活動への支援制度

履修生が自ら発案する社会課題に関する実践活動について、活動目的や実施計画を審査した上で、一定の範囲内で旅費などの活動経費を支援します。

▶ チューター教員制度

学修の目標設定やプログラム履修の過程で生じた問題等についての相談を随時受け付け、助言等の支援を行います（Basicコース本履修生およびAdvancedコース履修生対象）。各履修生に対して2名程度の教員を配置します。

▶ 経済的支援制度

- ●コースワークにおける海外実習、国内実習、その他実践活動等について、旅費等の参加費を支援します。
- ●給付型奨学金制度（Basicコース本履修生およびAdvancedコース履修生対象）を設けています。支給金額は年度毎に決定します（2023年度修士課程履修生対象支給額：月額6万円）。ただし、受給資格を満たさなくなった場合、支給を停止します。他の給付型奨学金やフェローシップ、次世代プロジェクト、JSPS特別研究員（DC）研究奨励金との重複受給はできません。
- ●授業料免除制度（博士課程履修生対象）を設けています。

履修生の活躍

9 期生 ｜ 瀬戸 ひろえさん（人間科学研究科）

9期生の瀬戸ひろえさん（人間科学研究科）は、超高齢社会の課題解決に向け、多様な活動を展開しています。自律的な健康管理をサポートするツールの開発を目指し、キャンパスライフ健康支援・相談センターにて医療ビッグデータ解析を行い、その成果は府営のアプリ「アスマイル」に搭載されると共に、2本の国際論文に掲載され、また学会発表では学生研究発表賞を2度受賞しました。健康管理ツールを改良するために、自主実践活動を活用し、オランダにて研究開発やインタビューを行いました。また、スマホ支援や新しい地域コミュニティを形成する活動など、高齢者の社会参加を促進するための社会活動にも取り組んでいます。

10 期生 ｜ Kang Kiwon さん（人間科学研究科）
｜ 廣畑 貴一 さん（工学研究科）

10期生のKang Kiwon（人間科学研究科）さんと廣畑貴一さん（工学研究科）は、つくば国際会議場で実施された「大学院教育改革フォーラム2023」にて、自身の研究やプロジェクトに関するテーマを選択して、ポスター発表を行いました（2023年12月1日、2日実施）。

「国際性と学際性の日常化」をテーマに、日英2言語による講演や事例紹介、ディスカッション、ワークショップが繰り広げられ、ポスターセッションでは全国の卓越大学院プログラム・博士課程リーディングプログラム等から69名の学生が集った中、両名ともが優秀賞を受賞しました。

12 期生 ｜ 北村 祐稀 さん（情報科学研究科）

12期生の北村祐稀さん（情報科学研究科）は、高校時代に第13回アジア太平洋情報オリンピックの日本代表として銀メダルを獲得し（2019年5月）、以降も公式テキスト執筆（2022年8月）などを通じて後進の育成に寄与してきました。大学の研究では、高校の情報科の授業で活用できるWeb教材を開発しており、学会発表では学生奨励賞を受賞しました（2023年8月）。この教材は無償で一般公開しており、複数の高校で採用されたほか、河合塾が運営するWebサイト「キミのミライ発見」の取材を受けて紹介記事が公開されました（2023年11月）。研究活動に留まらず、様々な形で社会へ貢献しています。

履修生の研究活動等

区　分		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
(1)	学会発表件数	56	30	26	45	74	90
	（国際会議での発表数）	24	12	9	15	14	18
(2)	論文発表件数	30	20	11	26	25	31
	（レフェリー付論文発表数）	16	18	10	24	13	20
	（外国語で作成した論文発表数）	17	13	3	6	8	12
(3)	研究発表による受賞件数	9	6	2	4	6	15
	履修学生数	61	47	40	34	52	70
	（博士後期課程に在籍する履修学生数）	29	16	15	15	22	29

【 2024年2月10日時点、準履修生も含む 】

修了生のキャリアパス

2016-2023年度のコースワーク修了者の就職先（下表）はそれぞれが特徴的なキャリアパスを開拓しており、大学院での研究内容とは直接的な接続のない業種への就職が多く含まれています。新規開発技術の製品化を社内の多様な部署と調整して進める役割を担う者や海外における新規事業開発を担う者など、本プログラムで修得した知識やスキルを期待されて、従来の博士人材では考えられなかった道を歩み始めた多数のチャレンジャーがいます。

修了年度	所属研究科	所属専攻	専門分野	就職先等	産官学民
2016	文学研究科	文化表現論専攻	美学	大阪大学(教員)	学
2016	人間科学研究科	人間科学専攻	現代思想	神戸市	官
2016	人間科学研究科	人間科学専攻	環境行動学	認定NPO法人 環境エネルギー政策研究所	民
2016	経済学研究科	経済学専攻	ミクロ経済学、一般均衡理論	同志社大学(教員)	学
2016	工学研究科	精密科学・応用物理学専攻	バイオセンサー	シスメックス株式会社	産
2016	工学研究科	精密科学・応用物理学専攻	プラズマ工学、超精密加工学	シスメックス株式会社	産
2016	医学研究科	医学専攻	細胞生物学	パナソニック株式会社	産
2016	医学研究科	保健学専攻	基礎看護学	日本アイ・ビー・エム株式会社	産
2017	人間科学研究科	人間科学専攻	現代思想	PwCコンサルティング合同会社	産
2017	人間科学研究科	人間科学専攻	教育社会学	愛知淑徳大学(教員)	学
2017	理学研究科	化学専攻	生物物理化学	株式会社資生堂	産
2017	生命機能研究科	生命機能専攻	細胞生物学	ヤンマーホールディングス株式会社	産
2017	工学研究科	精密科学・応用物理学専攻	ナノフォトニクス	横河電機株式会社	産
2017	工学研究科	環境・エネルギー工学	排水処理	株式会社三菱総合研究所	産
2017	工学研究科	環境・エネルギー工学	環境創成学、持続可能性科学	国連大学サステイナビリティ高等研究所	学
2017	薬学研究科	創成薬学専攻	生物学無機化学、物理化学	大阪府	官
2017	薬学研究科	創成薬学専攻	核酸化学、スプライシング制御	中外製薬株式会社	産
2018	文学研究科	文化表現論	演劇学	株式会社リクルートホールディングス	産
2018	言語文化研究科	言語社会専攻	アメリカ文学	麗澤大学(教員)	学
2018	経済学研究科	経営学系専攻	経営学	広島市立大学(教員)	学
2018	人間科学研究科	人間科学専攻	思想、芸術およびその関連分野	大阪大学(教員)	学
2018	人間科学研究科	人間科学専攻	グループ・ダイナミックス	京都大学防災研究所(SPD)	学
2018	国際公共政策研究科	比較公共政策専攻	社会科学	追手門学院大学(教員)	学
2018	国際公共政策研究科	比較公共政策専攻	経済学	ソニーグループ株式会社	産
2018	法学研究科	法学・政治学専攻	西洋政治思想史	京都市地域おこし協力隊・個人事業主	民
2018	法学研究科	法学・政治学専攻	社会科学	小樽商科大学(教員)	学
2018	理学研究科	生物科学専攻	生物学	ロート製薬株式会社	産
2018	生命機能研究科	生命機能専攻	実験美学	個人事業主	産
2018	工学研究科	応用化学専攻	化学	パナソニック株式会社	産
2018	工学研究科	機械工学専攻	設計工学	ダイキン工業株式会社	産
2018	工学研究科	地球総合工学専攻	船舶海洋工学	大阪大学(教員)	学
2018	工学研究科	電気電子情報工学専攻	人工知能、知識工学(オントロジー)	日本アイ・ビー・エム株式会社	産
2018	工学研究科	ビジネスエンジニアリング専攻	工学教育	株式会社ツクルバ	産
2019	人間科学研究科	人間科学専攻	認知心理学	立命館大学(PD)	学
2019	法学研究科	法学・政治学専攻	法理学・法哲学	大阪大学(教員)	学
2019	経済学研究科	経済学専攻	公共経済学・財政学	千葉大学(教員)	学
2019	理学研究科	宇宙地球科学専攻	惑星科学	宇宙航空研究開発機構 JAXA	官
2019	医学系研究科	医学専攻	基礎医学	独立行政法人医薬品医療機器総合機構	官
2019	医学系研究科	保健学専攻	保健学	ハーバード大学(PD)	学
2019	工学研究科	環境・エネルギー工学専攻	原子力工学	東京電力ホールディングス株式会社	産
2019	基礎工学研究科	物質創成専攻	物性物理学	ドイツ研究センターヘルムホルツ協会ユーリッヒ研究センター(研究員)	学
2020	歯学研究科	口腔科学専攻	予防歯科学	エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ株式会社	産
2020	工学研究科	環境・エネルギー工学専攻	磁気科学	パナソニック株式会社	産
2020	国際公共政策研究科	比較公共政策専攻	国際関係論	株式会社DigitalBlast	産
2020	言語文化研究科	言語社会専攻	アメリカ文学	愛知大学(教員)	学
2022	言語文化研究科	言語文化	日本語教育	三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社	産
2022	言語文化研究科	言語文化	言語学、英語学、認知言語	大阪大学(教員)	学
2022	言語文化研究科	言語社会	ドイツ移民研究	大阪大学(教員)	学
2022	工学研究科	機械工学	設計工学	有限責任監査法人トーマツ	産
2022	工学研究科	ビジネスエンジニアリング	複合材料	自営業	産
2022	理学研究科	宇宙地球科学専攻	惑星科学	株式会社ウインドエナジーコンサルティング	産
2023	人間科学研究科	人間科学専攻	ジェンダー	清水建設株式会社	産
2023	工学研究科	地球総合工学専攻	船舶海洋工学	一般財団法人 日本海事協会	民

【 2016～2023年度のコースワーク修了者の進路状況 】

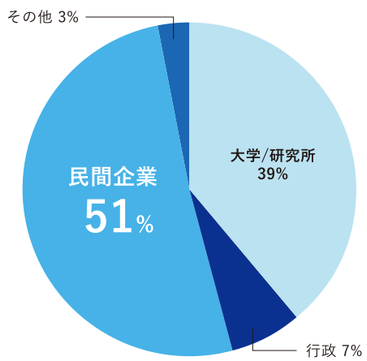
履修学生の進路内訳

過半数(51%)が民間企業を選択

- 全国の博士号取得者の民間企業就職割合（34%, 内閣府調査, R5.）に比べて民間企業就職割合が高い。また民間非研究職（総合職）への就職も高い割合となっています。
- プログラムでの取り組みにより多様なキャリアパスが実現されていると言えます。

アカデミア志望者の多くが大学教員等 常勤研究者へ

- 超域履修生のアカデミア志望者（22名）のうち18名(81.8%)が常勤の大学教員/研究員として勤務し、4名が学振PD, 非常勤研究員等として採用されています。これは学振DC採用者の博士取得5年後の常勤研究者割合（75.4%, 内閣府調査, R5.）よりも高い値となっています。



修了生の声

3期生 | 白瀧 浩志 さん　パナソニックホールディングス株式会社

私は現在、パナソニックホールディングス株式会社にてエネルギーに関する研究開発に取り組むと共に、株式会社Material Doorsの代表取締役として実験化学者を支援するクラウド型ソフトウェアの開発・販売を行っています。私は、これからの博士人材は、研究活動による「真理追求」だけでなく、社会の要求や環境への配慮などの種々の視点を踏まえながら、科学技術を社会に還元する中核になる事が求められていると思います。その意味で、超域の活動は様々な「社会的な要請」を肌で感じつつ、「課題の本質を問う力」を鍛えられた貴重な期間だったと感じます。

私自身もそうだったように、これを読む皆さんは、人とは異なる道を歩むことに対し、「不安」や「孤独」を感じていると思います。ただ、超域で学ぶ事や出会う人は人生を豊かにするものだと社会に出た今、確信を持ってお伝えできます。ぜひ研究だけでなく超域での挑戦を経験した、皆さんの大いなる活躍に期待しています。

7期生 | 岡田 茉弓 さん　三菱UFJリサーチ&コンサルティング

文系博士課程学生は修了後、大学教員になることが一般的です。日本語学校経営者を研究対象とする私は、その道が最善なのかずっと疑問に思いながら、明確に新たなキャリアを見いだせずにいました。その中で、経営コンサルタントという現職を志したのは、超域イノベーション総合でノーリツプレシジョン代表取締役社長の星野達也氏に出会ったことが大きかったです。マッキンゼー出身の星野さんのもとでプロジェクトを進める中で、大学の研究や授業では教わることがなかった経営者としての考え方、会社としてのプロジェクトの進め方を学ぶことができました。この経験から、星野さんの前職であるコンサルタントに私が興味を持つのに時間はかかりませんでした。博士課程の学生のキャリア形成は、情報が限られ、進路選択が限られる傾向にあります。その中で、研究とは異なる超域という環境に身に置くことで、自身にとって最適のキャリア選択が可能になったと思います。

履修生の声

9期生 | 物江 祐弥 さん　薬学研究科（創成薬学専攻）

私は、博士前期課程を修了するまで薬学一筋で研究をしており、他の分野と関わることが全くと言っていいほどありませんでした。超域の存在を知った時は、素直に面白そうで且つ研究に専念できる支援が受けられるという印象を受けました。と、同時に全く異なるバックグラウンドをもつ学生との交流で本当に視野が広がるのかという「疑念」があり、それを確かめる意味も込めて超域プログラムに飛び込みました。

超域に入ってからは、授業を通して異分野の学生と様々な社会課題に対して、互いの特色を生かしながら解決策を模索するプロセスが学べました。少し分野が異なるだけでも、課題に対するアプローチもアウトプットの仕方もまるで違い、最初は戸惑うこともありましたが、気付けば楽しくて活動にのめり込んでいました。また、何気ない雑談からも面白い発想や話が聞けて、専門研究から頭を切り替えられるのでいい意味での気分転換になっています。

超域はグローバルな活動を積極的に行える点でも魅力的です。実際に、超域に来てから海外のアカデミアに挑戦したいと思うようになりました。私のキャリアプランを動かし、より大きな目標へと向けてくれたのは間違いなく超域のおかげであると思います。

10期生 | 寺田 沙耶 さん　医学系研究科（保健学専攻）

私は修士課程修了後、看護師として5年間の臨床経験を積み博士課程に入学しました。医療現場にいた時、専門性の特化と引き換えに、専門外の知見の乏しさや視野の狭さを感じるようになりました。しかし、超域プログラムでは分野を超えた活動の中で、普段出会わないような人とたくさん関われるので、専門分野のみに思考や知識が偏ることがありません。豊かな発想力を身に付けつつ、同時に専門性向上の必要性も実感できるので、結果的に研究活動にも生かすことができます。

超域プログラムは対人面の環境も恵まれていて、あらゆる問題に対して先生方が親身にサポートしてくれます。加えて、様々な意見をくれる他分野の学生達に囲まれて過ごす時間もとても刺激的で、社会に出たことがある立場だからこそ特にそのありがたみを感じます。超域プログラムの活動は大変そうだというイメージがありましたが、様々なタスクを抱える場面は社会でも往々にしてあると思います。皆で協力して活動を楽しみながら、自身のキャパシティを広げる練習もできるので、それ以上のものが得られる場所です。研究活動で多忙な中でも、有意義で貴重な時間を楽しく、かつ充実して過ごせる超域プログラムに所属することが、自身の人生の豊かさに繋がっていると実感しています。

プログラム担当者等一覧

大阪大学は、総力を挙げて、超域イノベーション博士課程プログラムを実施しています。
プログラムの運営には、下記の教員が全学的な視点からもしくは研究科や履修生が在籍している専攻の代表者として選出されて、参画しています。

（2024年4月1日現在）

■プログラム責任者

田中　敏宏	――	理事・副学長

氏　名	所　属	職名等
堤　研二	人文学研究科・人文学専攻 （文学研究科兼務）	教授
山下　仁	人文学研究科・言語文化学専攻 （言語文化研究科言語文化専攻兼務）	教授
山根　聡	人文学研究科・外国学専攻	教授
三好　恵真子	人間科学研究科・人間科学専攻	教授
森田　邦久	人間科学研究科・人間科学専攻	教授
近藤　和敬	人間科学研究科・人間科学専攻	准教授
福井　康太	法学研究科・法学・政治学専攻	教授
浦井　憲	経済学研究科・経営学系専攻	教授
寺田　健太郎	理学研究科・宇宙地球科学専攻	教授
志賀　尚子	理学研究科・生物科学専攻	教授
石川　春人	理学研究科・化学専攻	講師
河原　行郎	医学系研究科・医学専攻	教授
小川　和彦	医学系研究科・医学専攻	教授
石田　隆行	医学系研究科・保健学専攻	教授
竹屋　泰	医学系研究科・保健学専攻	教授
古田　貴寛	歯学研究科・口腔科学専攻	教授
齊藤　達哉	薬学研究科・創成薬学専攻	教授
津島　将司	工学研究科・機械工学専攻	教授

■部門長・プログラムコーディネーター

松田　秀雄	情報科学研究科・バイオ情報工学専攻	教授

氏　名	所　属	職名等
林　高弘	工学研究科・機械工学専攻	教授
内山　進	工学研究科・生物工学専攻	教授
山口　容平	工学研究科・環境エネルギー工学専攻	准教授
木多　道宏	工学研究科・地球総合工学専攻	教授
倉敷　哲生	工学研究科・ビジネスエンジニアリング専攻	教授
原　圭史郎	工学研究科・フューチャーイノベーションセンター	教授
原田　研介	基礎工学研究科・システム創成専攻	教授
長原　一	情報科学研究科・コンピュータサイエンス専攻	教授
浦西　友樹	情報科学研究科・情報システム工学専攻	准教授
南　和志	国際公共政策研究科・国際公共政策専攻	准教授
佐々木　洋	生命機能研究科・生命機能専攻	教授
山﨑　吾郎	COデザインセンター	教授
大谷　洋介	COデザインセンター	准教授
辻田　俊哉	COデザインセンター	准教授
小川　歩人	プログラム特任教員	特任講師
田島　知之	プログラム特任教員（COデザインセンター）	特任講師
荒木　智子	プログラム特任教員	特任助教
大津　真実	プログラム特任教員	特任助教
高田　佳奈	プログラム特任教員（COデザインセンター）	特任助教
辻田　那月	プログラム特任教員	特任助教

詳しくは超域webサイトをご覧ください。

超域　検索

https://www.cbi.osaka-u.ac.jp

■ 問い合わせ窓口

大阪大学 超域イノベーション博士課程プログラム事務室
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1 産学共創D棟2階
TEL：06-6879-7390　FAX：06-6879-7399
E-mail: info@cbi.osaka-u.ac.jp

OSAKA UNIVERSITY

2024年4月発行
発行：大阪大学 超域イノベーション博士課程プログラム